

戦跡で継ぐ記憶

沖縄・長野で考える

南風原町喜屋武の大城逸子さん(63)にとつて、沖縄陸軍病院南風原壕のある黄金森は昔からの遊び場だった。爆弾の跡で穴がポコポコあいていたが何なのかを知らず、学校でも沖縄戦を教えられなかった。沖縄戦が教育で扱われるようになったのは、日本復帰以降のことだ。

2007年に「南風原平和ガイド養成講座」を受講し、身近な人たちの体に残る傷痕が「戦争のせいだったのか」と気づいた。知らないって怖い。それから戦争体験者の聞き取りも始めた。

外気を遮る扉を開け、大城さんの案内で真つ暗な細い20号壕を進む。天井に火炎放射

南風原陸軍病院壕 調査通し住民に機運

上

の焼け跡がこびりついている。沖縄戦当時、一帯に30余りの壕が掘られていた。

1980年代の厚生

◇

◇

省(当時)の遺骨収集 9月、沖縄から32軍壕と戦争の記憶を継承する有志が長野県の松

た。南風原高校教師だった吉浜忍さん(72)は生徒らと町内全ての集落で戦災調査し、町内で



沖縄陸軍病院南風原壕群20号壕内でガイドする大城逸子さん。壁にはツルハシの跡が刻まれ、当時の坑木も残っている。8月、南風原町